

巻頭言

研究する協同労働

大高 研道（協同総研理事長／明治大学教授）

4月から本務校である明治大学の特別研究休暇制度を活用し、一年間の予定で北海道大学教育学研究院学術共同研究員として札幌に滞在している。北海道大学とイギリス北アイルランドにあるアルスター大学 (Ulster University) の交換留学生として渡英したのが1997年7月だったので、ちょうど25年ぶりの札幌での生活である。

北大での受け入れ先は、本研究所理事でもある宮崎隆志先生で、院生時代を含めると指導教員かつ共同研究者として約30年間の付き合いになる。院生ゼミ、学部生の授業、夏季集中講義など、本年度をもって退官する恩師の最後の一年を共に過ごし、学びなおす貴重な機会になっている。ただ、院ゼミなどでの私の立ち位置は微妙である。指導教員は、一定の年数を共にして、院生の問題関心・背景・研究領域を理解したうえで、最適なアドバイスをする。そして、最終的には院生自身が自分なりに理論構築をして、実証研究を行い、論文を完成させる。その空間に、研究領域・関心が近いとはいえ、ある意味では旅人のような一時滞在者の私が紛れ込んできたことになる。

ふと、ワーカーズと私自身の関係に似

ているのではないかと感じた。協同労働の世界にどっぷりと漬かっているとはいえ、ワーカーズの組合員として毎日苦労を共にしているわけではない。事業本部長のように、管轄エリアの事業・活動に責任を負っているわけでもない。自分の考えを押し付けて現場を混乱させてはいけなし、現場の文脈を無視してまるで風のように現れて去っていく存在でも意味がない。そのようなことを十数年考え、悩みながら研究者としての自身の立ち位置と役割を考え続けてきた。

* * *

北海道では、北海道事業本部にも何度か伺い、総代会議や協同労働推進ネットワークキックオフミーティングなどにも参加させていただいている。総代会議でのパネルディスカッション「法施行直前、協同労働を深め、労働者協同組合法の歴史的意義を問う」では、道央・道南・道北・道東エリアからの報告があり、課題を含めて各実践の到達点を自分たちなりの言葉で語る雰囲気と熱気には圧倒された。全体討論では、登壇者が会場の組合員に直接質問を投げかけ、意見が飛び交い、言葉がシンクロしていく。協同労働推進ネットワークも、ワーカーズだけで

なく市民活動にかかわる多様なアクターが参加しており、すぐに組織化に向かうのではなく、イメージを共有する時間を大切にしている姿が印象的だった。これらの対話的行動に接し、社会連帯活動(行動)と当事者研究を含む実践の学びあい(学習)が大切な価値として根づき始めていることを実感している。

札幌地域福祉事業所最初の自前事業であり社会連帯活動の成果が「篠路まちづくりテラス篠路和氣藍々」である。和氣藍々では、毎月第三水曜日に当事者研究が開催される。まず参加者全員がその日の気分と体調を語る。7月20日の参加者はオンラインも含めて31人。この日は、15の当事者研究の理念を輪読し、心に残ったことや思ったことをグループに分かれて自由に話す「理念ミーティング」から始まった。ルールは「言いつばなし、聞きつばなし」。つまり、人が話している最中に言葉を挟まないこと。パスもOK。見学者が多かったこの日は当事者研究の説明の場を設けるつもりだったが、Aさんが切り出し、そのまま当事者研究が始まる。Aさんの困りごとを真剣に聞いて、参加者はいろいろな質問やアイデアを出し合う。具体的な対処の方法、人間関係で悩んでいるAさんの相手方の気持ちや状態に思いを寄せる「ひょっとして」、そして障がい者に対する社会のあり方に問題がある、といった大きな話まで出てくる。結論はないが、最後にAさんを含めて会場の中から「今はリサーチ

の段階」という言葉が自然に出てきた。当事者研究の引き出しの多さと懐の深さを体感した。その一端に触れさせていだいた感想は、研究は頭でするものではなく、身体と一体化したものだということである。

その内容は日によって変わるそうだが、だれが組合員か当事者か見学者か……。最後まで分からないまま会は心地よい余韻を残したままタイムアップとなった。また来たいと思った。

* * *

一般社団法人協同総合研究所第10回総会(通算32回)が2022年6月25日に開催された。総会が恙なく執り行われたことの報告とともに、あらためて会員のみなさまの研究活動へのご献身に衷心より御礼申し上げたい。昨年、理事長拝命後の最初の理事会(2021年8月7日)で、実践者と研究者が協同労働の協同研究をすることを目的に生まれた協同総研の役割を改めて問い直すことを大テーマに掲げさせていただいた。もちろん、その背景の一つには本年10月1日に施行される労働者協同組合法がある。新たな段階を迎え、その実践の核にある「協同労働」をより広く、より深く研究していくことが、これまで以上に重要になってくる。

そのためにも、研究と実践を意識の上でも行動の上でも分離させず、「実践する研究者」と「研究する実践者」へと共に成長することをめざしたい。私のもっとも好きなワーカーズの研究交流の場の一つは、毎年2-3月頃に開催される労

協連主催の「協同労働・よい仕事研究交流全国集会」である。この集会には、毎回多くの研究者がコメンテーターとして参加するが、継続的に研究者と実践者が関わりながら実践を深めるような動きは必ずしもつくり出せていない。「専門家」は協同労働の実践を感動をもって受け止め、自身の研究関心にひきつけて貴重なコメントをしてくれるが、それが現場の知として根づくまでには至っていない。「実践者」は、その言葉に励まされ、現場に持ち帰って仲間と共有するリーダーもいるだろう。実際に、現場サイドでも自分たちの協同労働・よい仕事の実践の意味を深める研究を行いたいという声は多い。また、それぞれの地域で一緒に研究活動をしたと考えている研究者もたくさんいる。

私自身、学部生時代に協同組合研究の世界に足を踏み入れ、2006年埼玉への転任をきっかけにワーカーズと出会い、以来、たくさんの学びの機会が与えられた。信念を持って行動している実践者に生半可な知識で偉そうなことを言ってもすぐに見破られてしまう。学生時代に接した農協や生協の実践者もそうであったように、厳しくも暖かなまなざしをもって研究者を育ててくれる実践者はたくさんいる。

そのような双方向的な学びあいがあるのは、研究者と実践者の双方が忙しくなりすぎたこともあるが、やはりつながる機会が少ないことによるところが大きいのではないだろうか。とすれば、協同総研に求められているのは、

多様なつながりの媒介機能ともいえる。このような問題意識を事務局と常任理事を交えて共有する最初の一年であったように思う。

* * *

一年間の思考を経て、今年の総会では「たたき台」として図1のような8つの研究課題案を提示させていただいた。この図は、協同労働を中心に据えて、思いつくままに今大事だと思われる課題を配置してみたものである。決して研究テーマを限定することを目的としたものではなく、むしろ、突っ込みどころ満載の「未完成」の雰囲気大切にしたい。常任理事会では、これまで多様な人びとが集う「プラットフォーム型」の機能に力点を置いてきた協同総研の役割を、特定の課題に取り組む「プロジェクト型」に転換することを意図しているのか、という懸念や議論もあった。結論的に言えば、そのような意図はない。眼目は、むしろ協同労働の実践理論構築には多様な研究テーマがかかわっていることを可視化し、会員が積極的・主体的にかかわる協同研究実践の可能性を広げていきたいという点にある。

また、検討の際には縦軸と横軸が何度書き直された。現段階では横軸「すぐに-じっくり」、縦軸「既存の研究分野-新しい研究分野」と暫定的に枠付けしてあるが、協同労働の広がりという観点からの整理であるため、「新規」の研究分野とはいっても既存のアカデミックな領域では決して「新しい」ものではない。

協同組合研究という観点からも、たと

えば「協同組合間協同」は、50年以上前の1966年に改正された国際協同組合同盟(ICA)原則に加えられており、わが国でも生協と農協・漁協の産直をはじめとした協同組合協同・提携の豊かな蓄積がある(私の卒業論文・修士論文のテーマがまさに協同組合間の協同であった)。ワーカーズでも、その萌芽期には農協・生協の物流センターや病院の建物メンテナンスが主業務であり、つい最近まで業種別事業実績報告書に「協同組合間提携」という項目があった。にもかかわらず「新しい」研究領域に位置づけたのは、仕事の委託-受託といった次元の「提携」を超えた協同組合の仲間どうしの協同の再構築が、持続可能な活力ある地域社会の実現のカギになるという思いがある。

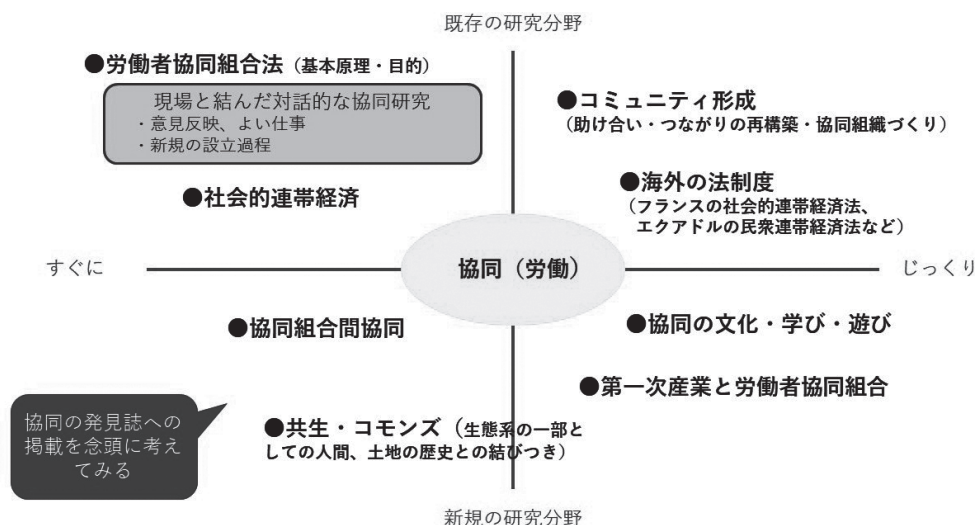
「じっくり」も同様である。「コミュニティ形成」は、ワーカーズの実践に即してみれば「みんなのおうち」構想や「ま

ちづくり講座」など、すでに具体的な実践が展開している。敢えて「じっくり」に位置づけたのは、それらの取り組みが持続的な協同の文化として地域に根づいていくプロセスを丁寧に追いかける研究活動が継続的に必要だという思いがある。第一次産業は、法制化後、ワーカーズへの期待が高まっている分野であるが、営農だけでなく集落機能そのものをどのように維持するか、という農村生活問題として捉えたとき、協同労働が新たな息吹をもたらすことが予想される。

このように「つつこみどころ」満載のポンチ絵のようなものではあるが、重要なポイントは、個別領域に細分化されない「全体性」と「創り出す過程」を視野に入れ、各テーマの相互関連性を常に意識した協同労働の未来をいかに展望するかということにある。

* * *

図1 研究課題(2022年度版)



これらの議論を踏まえ、総会当日の午後に、早速、歩きながら考えるキックオフ研究会「『協同労働』の多元的な価値と可能性を考える～研究者と実践者の協同研究がはじまる～」の第一弾を、8月6日理事会日には第二弾を実施した。具体的な報告や当日の議論の内容については本誌をご覧ください。

当面の進め方としては、まず常任理事が司会・全体取りまとめ、理事が研究報告、それに対して実践者がコメントする。常任理事も話したいことが沢山あると思われるが、そこはぐっと我慢していただき、共通の問いを引き出す役割に徹していただいた。報告者は研究者や協同労働に関心を寄せている理事で、主に自身の研究や実践を自由に紹介していただく。依頼事項はただ一つ。その際に、協同労働との接点について必ず触れるということである。コメンテーターは、主にワーカーズで働いている理事・会員の方々と、現場感覚からの率直な感想（研究に欠けている視点を含む）に加えて、研究者と一緒に深めていきたい点、実際に協同研究したい現場を紹介してもらいたいとお願いした。

今後は、リーダー層に限らない多様なワーカーズメンバーにその輪を広げ、気負わず「できることから始める」協同研

究の可能性をともに模索していきたい。

単なる実践の意義づけ・権威づけのための研究ではなく、持続的かつ間主体的にともに研究する場をつくり、最終的には協同総研が媒介しなくても各地域で実践者と研究者が自己拡張的に学びあう「当事者研究」の文化が育まれることが理想である。挑戦的な試みであるため予測不能な方向に展開していくこと度々であるが、それでいいのではないかと感じている。楽しく刺激的な「研究する協同労働」の対話的空間に、是非、登壇者としても多くの方々に手を挙げていただきたいと祈念している。

* * *

労協センター事業団北海道事業本部近く、札幌の大通公園（西8丁目と9丁目の間）には、私の好きな彫刻家イサム・ノグチの作品である滑り台「ブラック・スライド・マントラ」がある。ノグチは「子どもたちのお尻がこの作品を完成させる」と語ったそうだ。学生時代は、誰もいないときはいつも一滑りしてその無機質な作品のなかに宿るぬくもりを感じていた。決して完成形のない、しかしそこに関わることで自体に存在の意味を実感できるような、そんな研究所の未完成の雰囲気と多様な人びとと共に創り出すプロセスをこれからも大切にしていきたい。